

〈原著〉

## フィンランドの家族支援

— ロヴァニエミ市におけるネウヴォラとチャイルドデイケアセンターの現地調査 —

木 脇 奈智子 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

太 田 由加里 (田園調布学園大学 人間福祉学部 社会福祉学科)

本研究の目的はフィンランドの家族支援制度に焦点を当て、子育ての社会化および脱ジェンダー化について検討することにある。

本稿では、2015年8月に実施したラップランド県ロヴァニエミ市におけるネウヴォラおよびデイケアセンター（保育所）におけるフィールド調査結果を報告する。現地の聞き取り調査のなかでみられた家族支援の理念、家族支援に携わるネウヴォラナース（保健師）やデイケアセンターのティーチャー（学士以上の資格をもつ保育士）およびラヒホイタヤ（保育士）の業務内容や労働環境について、日本とは異なる特色がみられた。ひとつは支援職と親との対等な信頼関係の構築である。今一つは、支援職の労働環境に配慮された休暇制度や、ツールなどの環境整備である。これらの結果から、フィンランドにおける家族支援の支援職の理念やあり方について考察した。

**キーワード：**フィンランド、家族支援、ネウヴォラ、保育所、ジェンダー

### 1. はじめに —本研究の目的と概要—

第二次世界大戦後、日本の子育ては性別役割分業とともに「母子」枠組みでとらえられてきた。1990年代以降の子育て支援政策および制度は、未就園児を持つ母親支援に矮小化されており、少子化と男女平等に関して効果を上げていない。ジェンダー平等の子育てや子育ての社会化に関しては世界の中でも大きく遅れている。

本研究の目的は、ジェンダー先進国におけるフィンランドの家族支援について、比較文化かつジェンダー平等の視点から考察することにある。その到達点として、現在日本が抱える子育ておよび子育て支援の課題や方向性を明確にすることが目的である。

フィンランドの家族支援に注目したのは、子育て支援を包括する概念として、対象を母子に限定することなく、母親とそのパートナー（子どもの生物学的父親もしくは義理の父親にあたる人、同性婚も含むが本稿ではわかりやすいように以下「父親」と呼称する）を対象に胎児期から小学校入学までを切れ目なくケアするネウヴォラのシステムが整っているからである。

ネウヴォラは子育てをするのは母親だけではなく、

父親はもちろん、社会全体であることが前提とされたシステムである。健診には父親も参加し、両親の良好な関係が保たれているか、アルコールや薬物依存、DVの可能性はないかなど、親の心身の健康もケアする。地域におけるワンストップ支援拠点であるネウヴォラは、定期健診以外にも予約をすればいつでも利用でき、同じネウヴォラナースが継続的に関わるシステムになっている。

ロヴァニエミ市に居住する親の99.5%がネウヴォラを利用している。これは、妊婦健診を受けた人はすべて無料であることと無関係ではないだろう。すべての国民（納税者）が次世代育成に税金を通じて関与することを当然視しているとみられる。子育ては親、とりわけ母親がするものとする日本とは、意識の上でも税制度の上でも大きな隔りがある。

筆者らはこれまでに、フィンランドのネウヴォラや育児パッケージ、日本における子育ての社会化の動向など国内で入手可能なデータによる原著<sup>12)</sup>を報告した。

本稿は、フィンランドを訪問調査した結果をまとめ考察を加えたものである。フィンランド最北部にあるラップランド県の県庁所在地であるロヴァニエミ市に

おけるネウヴォラおよびデイケアセンター（保育所）の現地調査の結果と、そこからみえてくる子育ての社会化、ジェンダー平等、支援職の姿勢、労働環境など、家族支援の理念について考察する。その上で、今後の調査に関する課題と焦点化を試みることを目的とする。

## 2. 調査の概要

本調査は2015年8月4日～10日、フィンランド最北部のラップランド県 (Lapland maakunta) の県庁所在地であるロヴァニエミ市 (Rovaniemi) で実施した (図1)。

フィンランドの国土面積は338,339平方kmであるが、これは日本国土の377,962平方kmにほぼ匹敵する。一方、フィンランドの人口は約544万人であり、日本でいうと北海道の人口約538万人に相当する。フィンランドの国土面積の約3割を占めるラップランド県の人口は約18万人であり、人口は全国の3.3%にすぎない<sup>34)</sup>。そのうち6万人がロヴァニエミに在住する。市の人口のうち約1万人はLapland大学の学生である。

ラップランドのほとんどが66°33'07"以北の北極圏に属し、夏期は白夜、冬期は極夜がいずれも1か月半ほど続く。人々の暮らしにとって冬期は非常に厳しい地域であり、日照時間の少なさによる高い自殺率やアルコール依存率などが報告されている<sup>35)</sup>。



図1 ロヴァニエミ市の位置

主な産業としては、オーロラやサンタクロース村などの観光があげられる。古くは原住民サーミによるトナカイの放牧がなされていた。現在もロヴァニエミ市内にはサーミの言語を用いた保育を行う保育所が1か所ある。

ロヴァニエミの歴史の中で特徴的なことは、1944年の第二次世界大戦中にドイツ軍の空爆により街を壊滅的に破壊されたことである。これはフィンランド軍の基地が近くにあったためといわれる。厳しい冬の気候と戦災のなかから、フィンランドの代表的デザイナーかつ建築家であるアルヴァ・アールトの手による都市計画により復興をとげた。厳しい条件下にあっても希望を見出ししていく北極圏の住民の強さを感じさせるエピソードである。

第二次世界大戦後以降、フィンランド政府は「労働環境としての男女平等」の理念を掲げ、政権が交代しても男女平等政策は揺らいでいない。労働年齢層の就業率は男性が70.6%、女性が68.2%と拮抗しており、特に法律家、医師は女性が多い。これは「生産性の低い土地に住んでいたためか、農業時代から女性も男性と同じくらい働き、発言権も持っていた」ためという解釈がある。同じ敗戦国である日本が、戦後に性別役割分業を進め、少子化に至ったこととは好対照をなしている。

本調査では、市内に7か所あるネウヴォラの1つを訪問し、ネウヴォラナース（保健師）に約1時間の聞き取り調査を行った。また、市内でも郊外の住宅地にあるチャイルドデイケアセンター（保育所）を訪問し、約5時間の聞き取り調査および参与観察を行った。最後にラップランド大学教育学部ジェンダーユニットを訪問し、保育者養成教育について約2時間の聞き取り調査を行った後、ジェンダーユニットの3人の教員とディスカッションを行った。施設訪問に関してはラップランド大学の研究者に手配の協力を依頼した。聞き取り調査は英語で行ったが、必要に応じて英語ーフィンランド語間の通訳を依頼した。

## 3. ネウヴォラにおける家族支援

### 3-1. 家族支援としてのネウヴォラ

ロヴァニエミ市内に7か所あるネウヴォラの一つ、集合住宅地内にあるHネウヴォラを訪問した。同じ敷地内に小学校、Lデイケアセンター、児童遊園、駐車場や駐輪場があり、近隣の親子連れが訪ねやすい環境が整っていた。ネウヴォラを訪ねたとき、相談を終えたばかりの父親、母親、そしてベビーバスケットに眠る赤ちゃんが出てきたが、それは平日の日中であった。

日本では平日の日中に乳幼児健診や妊婦健診が実施されるが、その健診に父親が同伴することはほぼ見られない。割合としては100%近く母子のみの健診である。最近では、母親の母が同行するということが見られる程度である。

Hネウヴォラの玄関には、衛生面の配慮からか、土足で入室しないように靴カバーが備えられており、靴カバーを施して入室した。日本のようにスリッパに履き替えることや靴箱はなかったが、衛生面とバリアフリーへの配慮が感じられた。

ネウヴォラに入ると広々とした空間があり、子どもたちが自由に遊べるスペースには遊具が備えられていた。子ども連れの妊婦とパートナーが訪れても、子どもたちは遊んで待ってられるような室内であった。母親が相談する間、子どもを安心して遊ばせる環境が整っていた。実際に私たちは就学前の子どもを連れて友人と一緒に訪れたのだが、私たちがネウヴォラで話を聴く間、子どもは室内の遊具で遊び、それに飽きたら屋外遊園で遊んでいた。日本では妊婦健診未受診の理由の一つに、「子どもの預け先がなかったために産婦人科に受診できなかった」という答えがあげられているが、ネウヴォラではそのような心配はないように見うけられた。

現在、フィンランド国内で800ヶ所存在するネウヴォラは、誰もが利用しやすいように、どの場所も同じような室内で遊具が備えられているとのことであった。その室内の壁には子育てにかかわる様々なちらしが貼られており、その言語もフィンランド語、英語、スウェーデン語など数か国語での用意がなされていた。

ネウヴォラナースがいる部屋に入り、1時間ほど話を聞いた。ネウヴォラナース（Aさん）はにこやかな笑顔で出迎えてくれ、その室内はフィンランドで有名なマリメッコ柄のカーテンとその同じ色合いの色調で整えられていた。ネウヴォラは相談室かつ検診室であり、妊婦の内診台や乳幼児の体重計などの設備もあるが、全体的にはまるで自分の家の居間のように落ち着いた雰囲気であり木の机や椅子が置かれていた(写真1)。

ネウヴォラナースは次々とフィンランド語と英語の資料を用意してくれ、それを見せながらまたはこちらの質問にも答えながら話を聞かせてくれた。その資料のなかには日本の母子健康手帳に準じる手帳もあった。それは病院での受診に必要な「母親手帳」と「子ども手帳」である。子ども手帳の色は2014年までは男子がブルー、女子がピンクであったが、2015年からはクリーム色の手帳になり、ジェンダーバイアスのない



写真1 ネウヴォラの室内

手帳に統一されるとのことであった。

フィンランドではナースの半数が男性であり、男性は救急などの体力が必要とされる部署や精神科病棟に配属される割合が高いとのことであった。

ネウヴォラは妊娠期からの女性と共に夫のドラッグやアルコール依存、喫煙への対応を行っているとのことであった。冬が長く寒さが厳しいことから、ドラッグやアルコール、タバコへの依存が強い男性への健康管理や予防の役割も担っているのである。

ネウヴォラナースのモットーとしては、常に笑顔でいること、ネウヴォラを訪ねた人々を温かく迎え入れること、相談に訪れたクライアントとの信頼関係を育むために、常に心を解放し相手を受け入れることを大切にしているとのことであった。

子どもが生まれる前から就学に至るまでの長期間の信頼関係を構築することが重要であると教えてくれた。新生児はしばらくネウヴォラで様子を見ることもあり、それには信頼関係を育むことが大切であると話してくれた。

最も印象的だったのは、「私たちの役割は親にレクチャーすることではない。話を聴いて家族に助言をすることです」と語ったことである。日本の子育て専門職は、医療職であっても保育職であっても、親に「指導」をするタイプの対応が多くみられる。ネウヴォラナースの立場は、「フィンランドの平等の精神に基づくものである」と述べ、無償のヘルスケア、無償の学校、無償の給食などを例にあげた。彼女の言葉にあるように、親と対等な立場で、子どもの胎児期から小学校入学までの期間に信頼関係を構築し、なにかあれば助言をするというナースが地域にいれば子育てをする親にとっては心強いに違いない。

一方、ネウヴォラではDVの加害者対策も行っており、男性労働者がDVを振るうことへの対策援助のプログラムをNGOなどと協力して実施しており、DV

加害者のエンカレッジをめざしているとのことであった。開設当時のネウヴォラには男性は訪れなかったが、最近では父親は喜んでやってくるようになり、父親、母親、子どもという個別の単位ではなく、それを家族という単位として家族の福祉や幸せをめざしている。しかしまだどちらかという母親が訪れるほうが多いのが現状である。

ネウヴォラでは両親がそろって話ができるようになってきている。子育てや家族関係その他で困っていることはないかを聞き、あるとしたら相談に乗る。またネウヴォラだけでフォローできない場合は専門機関と連携をとって、紹介するのが主な業務である。Aさんの話によれば、「かつては父親はネウヴォラに来なかった。今でも主として母親がくる。でもこの10年で父親は歓迎されるようになり、ずいぶん来るようになった。ネウヴォラは家族全てを対象としているのです」という。そして「パートナーたちは常にネウヴォラにくるのを楽しみにしている」ともいう。99.5%の家族がネウヴォラに通っていることから、ネウヴォラが家族生活に欠かせない存在になっていくことがわかる。全て無料であることも通所率の高さと関連していると考えられる。ネウヴォラにこない0.5%の人々のこない理由について尋ねると、「メディアで情報をえるので必要ない」「ヨガなど自然のもので対処するのがいいというポリシーをもっている」などの答えであった。

健診の回数などは前稿<sup>2)</sup>に示したが、そのほかにも予約をとればいつでも助言を受けることができる。筆者らも相談に乗ってもらった気分ネウヴォラを後にした。

### 3-2. ネウヴォラの理念

ネウヴォラの理念ともいべき子どもや家族に対する基本的な考えを、ネウヴォラでの聞き取り調査や両親に配布する資料 (Rovaniemi City 2015) から以下に把握する。

ネウヴォラでは、支援の対象は子どもを育てる「あなた、あなたたち(親)」ではなく、「私たち社会」という考え方、つまり社会が子育ての主体という考えが前提となっている。「あなた、あなたたち」が子育てをするのではなく、あくまでも「私、私たち」なのである。

このようにネウヴォラでの資料には「私たち(社会)」が子育てをする主体と明確に記している。ネウヴォラではその資料の使用言語はフィンランド語ではもちろんのこと、他国籍の人々や移民にも理解しやすいように英語、スウェーデン語、ロシア語による数冊の冊子が用意されている。また北極圏に近いロヴァニエミで

は、少数民族であるサーミ人への配慮から、サーミ語でのサービスも行われている。言語については受け取る側が選択できる。私たちには当然のように英語とフィンランド語双方の資料の2冊が渡された。

“We're having a baby”と題されたパンフレットの巻頭には、すべての子どもは人であり、個人であり、それぞれに多様である、そこには数え切れないほどの子どものタイプもあれば数え切れないほどの家族の形もあるというメッセージが書かれている。子どもをひとり親で育てる場合もあれば、それ以上の親で育てる場合もあるという表現で、人数や子育てする側の多様性を認めている<sup>5)</sup>。

それぞれの家族形態で子どもを育てることは特別のことではなく、当然のことである。民族だけでなく、親の数、両親が父親・母親だけではないパートナー関係も含まれるなど、家族形態のマイノリティ性を包含、尊重した考えが記されている。社会で少数派の人々が違和感なく読める内容となっている。

結婚に関しても、数回の結婚を想定した書き方、つまり「最初の結婚」や「それ以降の結婚」などという表記がある。初婚、再婚、再々婚などに伴う子どもの数や状況に対する配慮がなされ、国及び自治体が多様な家族形態、結婚回数の有無に関わらない考えを受容、承認し、個々の違いに対する支援を惜しまないというメッセージが寄せられている。

子育てをする人々に向けたネウヴォラの資料には生まれる前から人間の個別性を尊重し、あらゆる違いを受けとめ、どんな支援もしますよというソーシャルインクルーシブな姿勢が見受けられ、安心して相談に行けるような理念がその表現に表れている。

また冊子の執筆者である複数の著者名も記し、質問や意見がある場合の連絡先も電話番号だけでなくメールアドレスなどが明記されている。日本では公的な刊行物の場合、問い合わせや意見を寄せる先が明記されている場合もあるが、著者名の公表は極めて少ない。ネウヴォラでは内容更新の際、寄せられた意見も参考にする国の姿勢が読み取れる。

フィンランドは広大な面積に比して人口が少ない。さらに冬の時期には雪や氷による凍結などによって交通機関による移動が容易でないため、通信技術の発達とレベルの高さが認められる。どこの自治体にも電話番号だけでなく、HPや担当者のアドレスなどが記され、問い合わせ先が明確になっている。

HPも数か国語の言語が示されており、読み手によって言語の選択が可能で、情報の開示やアクセスのしやすさはネウヴォラだけでなくフィンランドのサービスの特徴といえる。

ネウヴォラで対象とする妊娠初期から子どもの就学前まで育てる生活のすべてが項目ごとにわかりやすく読みやすく記されている。冊子は4つの項目で構成されている。

#### ①妊娠中について

妊娠中の母体の変化や胎児の成長、それに伴うリスクや新たな局面や時期に対応する実践的かつ具体的な考え方、それに基づく行動、さらに妊婦は働いていることが前提となっているので、仕事上のリスクやそれをどう予防するか、その対応方法、最後に妊娠中のダイエットについても項目が設けられ、イラスト入りでわかりやすくその利点や危険な点が記述されている。

#### ②子どもの誕生について

子どもが生まれる前の準備や仕事の対応方法、仕事と育児の両立をはかるための社会的資源やサービス内容について記されている。

#### ③子どもが1歳になるまでの最初の1年間について

赤ちゃん和家人、赤ちゃんに必要なもの、赤ちゃんの世話、赤ちゃんの発達や育児、家の中での安全性、小児科医のことなどが記されている。赤ちゃんの世話は大変なことであるが、その世話は親をさらに成熟した大人にしていくということ、一人の人が赤ちゃんの世話をするだけでなく多くの人が赤ちゃんの成長にかかわるほうが良いとの意見、さらに赤ちゃんは大人を必要としているとの意見も記されている。赤ちゃんを育てる際は何よりも休息が大切、そして夫婦双方の時間の大切さも説かれている。

一方、赤ちゃんが健康でなかった場合、親がうつなどの精神疾患になった場合、離婚あるいはパートナーと死別したなど一人になった場合など、リスクマネジメントの考え方が根付いている。子どもを産み育てる過程が順調に進むわけではない、子育てする多くの人が共感、納得できるような理念の書き方である。

赤ちゃんにとっての兄弟姉妹のこと、兄弟姉妹は赤ちゃんの誕生で赤ちゃんに嫉妬するがそれは赤ちゃんが好きではないというサインではない、そして赤ちゃんにとっての祖父母の存在、フィンランド独自のマタニティパックのことなどが触れられている。また家の中の安全性としてテーブルや浴室など赤ちゃんが生まれたことで変えた方が良い助言なども含まれている。赤ちゃんへの話しかけ方、泣いている場合の赤ちゃんの気持ちの汲み取り方など、ネウヴォラで伝えるのは単なる子育てのノウハウではなく、子どもを育てることは一人の尊重すべき個性ある人間を育てることであり、そのためには安全性を確保しつつ家の中の環境を整えたり、子どもを育てる側の精神面のサポートや環境づくりが重要であること、子どもの個性による多様

な違いを認めること、個性の一つとして障害のある子どもへの対応など理念と具体例が記されている。

人が生きていくうえで遭遇する様々な事柄が想定され、それへの対応策までが理解しやすいように、離別や死別、パートナーの精神疾患、障害のある子どもの誕生など、誰もが遭遇する当然の事柄であるという認識のもとで、多くの社会資源やサービスが示されている。

赤ちゃんが泣く場合の理由について、泣く場合は通常は空腹が主な理由であるが、そのほかには生後月齢によって室温の高低によるなど、生後月齢によって泣く理由の相違点にも触れられている。それは断定的ではないが、そういうこともあるという選択肢の多くが示されていて、親はいろいろと考えながら子育てが出来る助言が記されている。

また泣くことの基本的考え方として、赤ちゃんが泣くことは赤ちゃんによる言語手段なので、それを理解するようにとの助言があり、その反対に親が怒ったり、暴力を振るうなどは避けなければならない、など前向きな理解と危険を回避するような書き方に特徴が見られる。

また泣かない赤ちゃんに対する心配についても述べられている。入浴の方法では赤ちゃんの体の洗い方、赤ちゃんの睡眠の意味、皮膚や爪、乾燥などについても記されている。季節によって赤ちゃんをどこで寝せるか、赤ちゃんの眠る場所や日光浴させるための方法についても温度や湿度まで細かく書いてある。具体的でかつ即応性に富む記述である。

離乳食についても赤ちゃんをあまり太らせないことを目標として具体的に食べさせる食材や分量についてまで記されている。子どもの発達では社会性、言語、動き、手の動き、聞いたり見たりすることなどの項目で示されていてわかりやすい。

家のなかの安全性や車中で気を付けること、おもちゃを選ぶ際に気を付けることなどが冊子の中で色違いで示され、短い言葉で簡潔に書かれていて理解しやすい。また赤ちゃんの視力、聴力、触力、身長や体重、病気やけがの時にどう対応するかについても言及がある。

#### ④子どもを育てる家族への給付について

社会保障や妊婦手当、両親手当、父親手当、短時間労働、学費積み立ての助成金、奨学金、児童手当、親の婚姻によらない子どものための手当、住宅手当、年金などを受け取ることができる。さらにデイケアセンターの利用や在宅援助、経済的な支援などを受けることができる。加えて障害のある子どもへのサービスや在宅育児手当、子どもと家族のためのガイダンスセン

ターがある。そこでは子どもの成長やそれを育てる若い親たちを支えるための活動を行っており、フィンランド国内で106か所ある。

①～④が示すようにネウヴォラは、母親の妊娠初期から関わりが始まり、母、父、お腹のなかにいる子どもの家族全体が対象である。母子保健法に基づき、母子のみが健診の対象とされている日本とは、視点が異なる。妊娠、育児、夫婦・親子関係を含めた家族支援体制を保障していることがフィンランドのネウヴォラの特徴といえよう。

#### 4. ロヴァニエミ市チャイルドデイケアセンター

##### 4-1. 市の家族支援制度とそのサービス

ロヴァニエミ市が発行する「乳幼児教育サービスのガイドンス」によれば、「自宅で子どもを育てている両親及び家族には、早い段階から無料の開かれたデイケアセンターでの活動、グループでの活動が提供されている。そこには幼稚園教諭や子どものチャイルドマインダーが子育てのスーパーバイザーとしており、子どもと家族はその活動に無料で参加できる。開かれたデイケア活動の目的の一つは、乳幼児期と就学前の子どもを対象に両親の子育てを支援することである。子どもたちが遊んだり、他の子どもや大人とどのように接したらよいか、対人関係に必要とされるソーシャルスキルを学ぶ場でもある。子育て方法の伝授や子育ての標準化を追求する場、機会でもある」とすべての子どもと親に対する就学前の支援について記述している<sup>6)</sup>。

それらが無償であり、子どものソーシャルスキルの発達だけでなく、親に対する支援に言及しているところが日本とは異っている。

さらに「子育ての標準化とは子どもと過ごす一日の流れや月齢や年齢、また子どもの発達に応じた一定程度の子育ての方法を示すことをさしている」とし「3歳以上の子どもが対象の開かれたデイケアのグループ活動はスーパービジョンのもとで実践される。子どもたちの成長と発達のためにすべての支援と目標を提示する。」ここに書かれたスーパービジョンは、ティーチャー（学士または修士をもつ保育士）が行う。これを補助し、子どもと関わるのが専修学校卒のラヒホイタヤ（保育士）である<sup>7)</sup>。

保育所に通わず、親が3年間の育児休暇を取得した場合には、在宅育児手当が給付される。「在宅育児手当は3歳以下の子どもを自宅で育てるすべての両親に社会保険庁（KELA）を通じて支払われる。また個人

的に子どもを見てくれる人を雇う場合も手当は支給される」。フィンランドにおいては、自分の子どもの子育ても無償ではないことが注目される。

さらに「開かれたデイケアセンターは就学前の時期において質の高い活動が提供され、場所によってはロヴァニエミならではのサーミ人対象のサーミ語でのデイケアも存在する」とし、先住民族や少数民族に配慮した子育て支援が行われている。

小学校入学前の1年間を就学前教育と位置付け、「就学前教育は就学を目前にした6歳の子どもを対象に、組織的に方向性を明確にした教育が行われている。就学前教育の原則は子どもに特化した方向性とアクティブラーニングを含む。子どもたちは遊びと活動をとおして学び、一日のうち、4時間のプログラムが提供され無料である」とし、小学校以上の教育との接続期の準備期間を設けている。これは保育所の年長時に対して実施される。

総じて「チャイルドデイケアは家庭と同じような環境のなかで少人数規模で、特に子どもに対する基礎的なケア（世話）や遊びに特化して実践されている」というように、家庭的な環境とケア、子どもたちが自主的に選択する遊びが保育所の中心である。日本のように待機児はなくすべての子どもが入所できること、すべて無料であることが特色である。

##### 4-2. チャイルドデイケアセンターの保育環境

ロヴァニエミ空港に近い住宅地にあるNチャイルドデイケアセンターを訪問した。主任保育士で6歳児のクラスを担当するMさんが対応してくれた。Mさんは当該センターに30年勤務しており、Mさんの娘さんも同僚として働いている。

センターには10か月から6歳までの子どもがおり、24人の子どもに対し2人のティーチャーと2人のnurseが配置される。現在6歳児クラスは12人が在籍し、ティーチャーであるMさんと2人の保育士が担任している。6歳児の部屋は3室に分かれており自由に行き来できる。日本でいえば教室であるが、ファブリックや家具の様子は一般の家庭の居間のようなであった（写真2）。

この日の朝は、全員が一斉に20分ほど歌や運動をした後、子どもたちは各自が何をしたいかを自主的に選び3つの部屋に分かれた。設定された造形を選んだ子どもの部屋、カードゲームを選んだ子どもの部屋、ツイスターゲームを選んだ子どもの部屋のそれぞれにティーチャーと保育士が一人ずつついた。遊びの内容は制限されることなく、金曜日は私物を持ち込むことが許される。たとえば一緒に午睡をするぬいぐるみ



写真2 チャイルドデイケアセンターの居室

(sleep with friend) などである。6歳児なので、数字やアルファベットを教える学習プログラムもある。

昼食の時間になると三々五々食堂に移動し、ピュッフェ形式の昼食を各自が皿にとり、食べ始める。一斉に食べたり片づけたりする日本とは異なっている。この日の昼食はじゃがいもとひき肉のオープン焼きとサラダ、これにライ麦パンと牛乳であった。テーブルごとに静かに話をする事は許されているが、大声を出したりテーブルを超えて話をする事はマナー違反として禁じられていた。子どもたちはたいへん慎ましく礼儀正しい。昼食後は午睡があり、その後におやつを食べて再び自由遊びがある。子どもたちの自由度と選択性が高いけれども放埒にはならない、フィンランドの教育の一端をみる事ができた。

#### 4-3. 保育士の労働環境

子どもたちの午睡の際に、保育士たちは Café room に集まってきて、自分でコーヒーをいれおやつを食べる。雑誌を読む保育士もいれば、「今日はこんなことがあった」と仲間に話す保育士もいる。この部屋は会議をするミーティング室とは別に設けられた休憩室であり、壁にはタペストリーが飾られ、施設内の他の空間とは異なる場所になっている (写真3)。

日本では、筆者の知る限りにおいて、Café room を設けている保育所はない。会議室すらない園も多く、労働者の多くは仕事用のデスクでお茶を飲んでいるのではないだろうか。子どもと関わる労働者は精神的肉体的負担が大きいため、このように緊張をほぐす時間と場所があることは重要である。労働時間は8時～16時の8時間である。労働者は5週間の夏季休暇を交代して取得することが義務付けられている。

保育労働者の肉体的負担のひとつに、日本では午睡の布団を敷くという労働がある。腰をかがめて数十枚の布団を敷くことは負担が大きい。このセンターでは



写真3 保育士の Café room

壁収納式の午睡用ベッドが備え付けられていた。これをMさんは立ったまま片手で2秒ほどでセットして見せてくれた (写真4)。

これと同様に、子どもの靴ひもを結ぶためのツールも保育労働者の負担軽減のために考案されたものである。白い部分に保育士がまたがり、手前の階段部分を子どもが上るように工夫されている (写真5)。腰痛は保育労働者の職業病であるかのようにいわれるが、労働環境にやさしいこれらのツールや居室の整備が、フィンランドの保育労働者の勤続年数の長さに寄与しているのではないだろうか。

また、子どもたちに対する外部講師として、造形 (Art design) や体育 (Gymnastics)、3週間に1回訪れる図書館バス、警察や消防による防災教育など外部機関との連携がとられている。冬期間について尋ねると、マイナス20度になる日でも0歳児から1日2時間は外遊びをする。日照時間が少ないからこそ、新鮮な空気を体内に取り入れることが大切だという答えであった。その他にハローウィンなど行事のパーティを年3回行っている。

保育士に対する研修は「しばしばやってくる」とM



写真4 保育士の労働環境に配慮をしたベッド



写真5 子どもに靴をはかせるツール

さんは語った。病院の看護師 (Special Nurse) による障害児との関わり方の研修や、ネウヴォラナスによる親への支援に関する研修など、専門性の向上を図る研修を定期的に積んでいることがうかがえた。

#### 4-4. 保育士の地位とジェンダー

「先生として尊敬されているが給与は低い」「修士号を持つ保育士の場合、資格で小学校で働くことができる。(その方が給与が高いので) 移りたい人が多い」と答えている。Café ルームで数人の保育士に同じ質問をしたところ、全員が「給与が低い」と答えた。自分たちの職業に誇りを持ちつつも、労働にみあうだけの給与は得られていないと感じている。

2012年より保育者養成制度が変わり、学士以上の資格をもつ保育士であるティーチャーに加えて、専修学校の子どもコースを卒業したラヒホイタヤが保育士として働くようになった。主担任をするのは前者である。このことについて質問すると「よくなったこともある」というMさんの見解であった。未就学児の教育、保育に関わる保育士の給与が低いことは日本と同様であった。子どもに関わる仕事はその専門性を可視化できないためか、もともと女性職であったからなのか、この点はフィンランドの教育・保育職の平均給与も含めて今後の検討課題である。

Nチャイルドデイケアセンターには職員30人のうち男性保育士が1人勤務している。60歳近いと思われる男性で、特別支援クラスを担当している。この方にお話をうかがうと「男性保育士は少ないね。なぜか知らないけど、特別支援クラスの担任か管理職になってしまう傾向にあるよ」とのことであった。彼が担任している特別支援クラスには障害児が5人、健常児が10人在籍している。健常児が障害児を支え助け合いながら育つことが、健常児にとってよいことであると話す。男性保育士が少ない点は日本と変わらない。その理由

については筆者らの今後の検討課題としたい。

Mさんに、子どもたちにおけるジェンダーについて尋ねると、「女の子はおおむねアクティブでスノーボービルなどの活動的な遊びが好きである。子育ての場面でいえば女性は強く、優位に立っていると思う」という。社会保険分野の部課長や、弁護士、医者、IT企業の管理職には女性が多いという。

フィンランドでも子育て分野においてはジェンダーバイアスが存在するとみられるが、分野によっては女性が優位であることが示唆された。保育職の給与の低さに関しては、子育てに高い専門性が期待されていないのか、あるいはその価値が認識されていないのか、など日本と共通する子育てとジェンダーの問題も今後の課題としてより深く探っていきたい。

## 5. ラップランド大学教育学部

ラップランド大学教育学部では、オウル大学と合同で学士以上の資格をもつ保育士であるティーチャーを養成している。ここで専任講師を務めるOさんに話をうかがった。Oさん自身は保育職として10年間働いたのちに修士号および博士号を取得し、現在は大学教育に従事している。カリキュラムは構造的かつシステムティックにPC上で可視化され、学内学外共に共有されていた。

学生が4年間で取得を求められる最低単位は180である。基礎教養教育 (Basic Education)、語学教育 (Language Communication) を基盤とし、その上に、専門基礎教育課程と専門応用課程がある。カリキュラムには、ネウヴォラにおける親支援の実習 (2週間) や保育所での乳幼児実習 (計7週間)、学士論文 (卒業必修) などに加え、マイノリティや多民族、特別支援について理論的に学ぶ専門教育がそろっている。Oさんは「教育の専門家を育てる」ことを強調し、ティーチャーは実践家ではなく、理論的専門性を持つ専門職であるべきだと考えている。

学士取得後に修士課程に進む学生も相当数いる。修士課程では、リーダーシップや職場組織運営など、マネジメントを学ぶ。修士を修了すると小学校教師になることもできる。

こうしたティーチャーに対して、3年間の専修学校を卒業した保育士については「制度改正以前は19歳で保育士として現場に出ており専門性が低かった。現在ははずいぶん向上したとはいえ、専門学校における養成は科学ではなくて実践であると思う」と両者の違いについて話す。

男子学生の割合を尋ねると「今年は20人全員が女



子。昨年は一男子がいた」とのことであった。Oさんの記憶によれば、10年前は保育士の97-98%が女性であった。現在はもう少し男性が増えているのではないかと言う。日本において男性保育士が少ない要因は、収入の低さであるといわれている。保育士の経済的事情、社会的地位、性別役割分業意識の視点から、今後日本とフィンランドの比較検討を行いたい。

## 6. まとめと今後の課題

### 6-1. フィンランドの家族支援の理念

今回の調査を通して、ロヴァニエミ市、そしてフィンランドの家族支援に対する基本的な考え方は、「あなたがたの(親)子育てを支援する」という視点ではなかった。家族に寄り添う専門職が、いつでも近くにおいて対等な立場で相談に応じ、必要な場合は他の専門機関に繋ぎ、妊娠初期から就学前まで同じ専門職が担当し、信頼関係に基づいた心通うサービスやシステムが出来上がっている。

ネウヴォラナースやチャイルドデイケアセンターのスタッフのモットーについて、フィンランド国が発行している *We're having a baby (1996)* では、以下のように理念を示している。

- ① 子どもやその家族と常に対等な立場で話し、相談に応じること
- ② 必要があれば他の専門機関に繋ぐという役割も担っていること
- ③ 子育てのノウハウだけでなく子どもを育てることの意味を伝えていく役割を担うこと
- ④ 一つの家族を一人の専門職が長期間にわたって継続的に担当し、信頼関係を構築すること
- ⑤ 家族が経験するリスクを含んだ様々なできごと、例えば離婚や死別、障害のある子どもの子育てや夫のDVなどにも対応すること
- ⑥ 家族を地域や社会から排除するのではなく、包摂していくというインクルーシブな姿勢が一貫していること
- ⑦ ナースや保育士という子育てに関する専門職が、各自の専門性だけでなく、どんな状況にあっても人を受容し、秘密保持、クライアントの自己決定などソーシャルワークの視点を保持していること
- ⑧ 民族や言語の違い、婚姻関係だけによらないパートナーとしての家族、初婚や再婚など結婚回数など、家族の様々な在りようなどその多様性を認めていること、そしてその多様性に対して非難することなく受容し寛容であること、家族として

のマイノリティにも配慮がなされていること

- ⑨ 子どもは人であり尊重されること、家族の多様性も尊重すること
- ⑩ 地域で用意されている制度やサービスなどの社会資源にアクセスしやすい情報をわかりやすく伝え、言語の違いにも対応していること、問い合わせ先も明確であること
- ⑪ 女性も男性も仕事をしていることを前提として制度やサービスの内容が設計されていること
- ⑫ 性別にかかわらず、人としての生活が尊重されていること
- ⑬ 子育てをするには、大人の休息が何より大切で、夫婦としての時間も大切にされなければならないことが子育てに関する資料に明記されていること
- ⑭ 子育てには、母親や父親など、一人の人が赤ちゃんの世話をするだけでなく多くの人が赤ちゃんの成長にかかわるほうが良いとの意見が尊重されていること
- ⑮ 何よりも生まれたばかりの子どもが健康でなかった場合、親がうつなどの精神疾患になった場合、離婚あるいはパートナーと死別した、一人になった場合など、リスクマネジメントの考え方が根付いており、その対応にいたるまでの情報が伝えられること
- ⑯ 子育ては順調に進むわけではないということが子育てする家族に伝えられ、多くの人々が共感、納得できること
- ⑰ 個性の一つとして障害のある子どもが生まれた場合はどこに相談すれば良いか、早い時期にどこに連絡すれば良いかなどが迅速に伝えられること
- ⑱ 子どもを育てる家族への支援制度や給付についても、社会保障や妊婦手当、両親手当、父親手当、短時間労働、学費積み立ての助成金、奨学金、児童手当、婚姻によらない子どものための手当、住宅手当、年金受け取りの情報が提供されること
- ⑲ 障害のある子どもへのサービスや在宅育児手当、子どもと家族のためのガイダンスセンターがある。そこでは子どもの成長やそれを育てる若い親たちを支えるための活動を行っており、フィンランド国内で106か所があること

上記のように、人が生きていくうえで遭遇する様々な事柄が想定され、それらへの対応策が理解しやすいように子育て家族に伝えられる。離別や死別、パートナーの精神疾患、障害のある子どもの誕生などは、誰もが遭遇しうる出来事であるという認識のもとで、多くの社会資源やサービスが展開されている。

ネウヴォラやチャイルドデイケアセンターなど子育て

てにかかわる機関や専門職に共通する点は、子育てする家族を支援することである。それは子どもを含めた一人ひとりの人としての暮らしを尊重し守っていくことが基本理念となっている。

これらの考え方や方法、システムなどは今後の日本の家族支援に参考にしたい。

## 6-2. 家族支援の根幹にあるものとは

フィンランドではアフーマティブ・アクションやクオータ制のようなジェンダープログラムがない。しかしジェンダー GAP 指数が世界第 2 位と高い理由は、ジェンダー視点というよりは女性、男性という性別を超えた「人」としての安全で豊かな暮らしを保障し、子育てや家族としての生活を保障するという姿勢が一貫していることにあるのではないか。

おわりに、今回のロヴァニエミ調査で得たフィールドワークの総括は以下のようである。

ひとつめに、フィンランド国家がもつ「人を育てること。支え合うこと」に関する土壌がある。

第二次世界大戦後のフィンランドは、経済的發展をめざす一方で、それだけを目的とせず、すべての国民が労働すると同時に支え合い、次世代を育てる仕組みを構築してきた。その根幹には、北方圏における自然の厳しさ、農業には適さない土地、戦争の脅威と艱難辛苦の歴史がある。そのため、フィンランドの国民は独特のメランコリーを有するといわれている。その豊かとは言えない国が生き延びる方策として、人が支え合うこと、教育を大切にすることという方針を打ち出してきたことは注目し値する。

第二次世界大戦後は、「労働環境としての男女平等」がフィンランド国の理念とされ、政権が代わってもその理念が継承されてきた。次世代の労働力を確保するために、教育保障、医療保障などの充実が図られた。胎児期からの家族支援もこの一環としてみることができる。労働者に対しては、育児休暇や有給休暇などのワーク・ライフ・バランスを保障している。女性も男性も、子どもを産み育てながら働き続けることを国家が期待しそれを保障しているのである。

一方、日本の子育て支援は「本来母親がすべき子育てに対する支援」という視点から設計されている。ジェンダーの視点に立脚すれば、母子保健法を含めて「母子」の枠組みを取り払い「家族支援」の制度を確立しているフィンランドに学ぶところは多いだろう。また、男女が次世代を育てながら働くことについては、近年「女性の活躍推進法」が法案化された(2015)。現在の日本の政策が「成長戦略(経済政策)」なのか「男女平等政策(社会政策)」を目指すものなのか問われて

いる(大東 2016)<sup>8)</sup>。その両方にも立脚しないと実現はないように思える。日本の労働と子育てにおけるジェンダーは、その枠組みの立て方において、緻密に分析していく必要があるだろう。

今後、筆者らはネウヴォラナースの養成機関や、子育て中の家族、支援専門職へのアプローチを計画している。その背景としての「国家として生き延びる姿勢」と具体的な社会保障や次世代育成についてより深く考察していきたい。

## 【付記】

本研究は、平成 27-29 年度文部科学省科学研究費基盤研究(C)15K01923「フィンランドと日本の家族支援における比較ジェンダー学研究」(研究代表者：木脇奈智子)による成果の一部である。

## 引用文献

- 1) 木脇奈智子・太田由加里「多様化する子育て支援の現状と課題：第 3 報—フィンランドの家族支援「ネウヴォラ」に着目して—」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』Vol.9, 2014, 35-43
- 2) 木脇奈智子・太田由加里「家族支援の比較ジェンダー学研究：第 1 報—フィンランドのネウヴォラと育児パッケージにみる子育ての社会化—」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』Vol.10, 2015, 5-12
- 3) Statistics Finland, Demographic Statistics (2015/3/30 発表)  
[http://www.stat.fi/tup/suoluk\\_vaesto\\_en.html/region](http://www.stat.fi/tup/suoluk_vaesto_en.html/region) 2016/3/6 アクセス
- 4) 総務省統計局「平成 27 年国勢調査結果」  
<http://www.stat.go.jp/data/nihon/01html> 2016/3/6 アクセス
- 5) The National Research and Development Centre for Welfare and Health, *We're having a baby*, 1996, Finland
- 6) Rovaniemi City, *Early Childhood Education Service Guidance*, Finland
- 7) 井上清美「幼保一元化にともなう保育者養成のゆくえ：フィンランドのケア共通基礎資格(ラヒホイタヤ)と幼稚園教諭の比較」『川口短大紀要』No. 29, 101-113, 2015
- 8) 大東貢生「女性活躍推進政策の展開と課題」『佛教大学総合研究所紀要』Vol.23, 2016, 31-45

## 参考文献

- 1) 藤井ニエメラみどり・高橋睦子『フィンランドの子育てと保育』明石書店, 2007
- 2) 高橋睦子「女性労働と子どもの人権の視点から見た家族の変容と福祉国家—フィンランドの事例研究」『総合政策論集』Vol.2, 島根県立大学総合政策学会, 2001, 137-151

- 3) 高橋睦子「福祉モデルの変遷—フィンランドの事例研究と福祉モデルの考察—」『総合政策論集』Vol.6, 島根県立大学総合政策学会, 2003, 31-48
- 4) 鈴木美奈子「母子保健と子育て支援の機能を一元化“子ども版地域包括ケアを目指す」『月刊地域保健』46(1), 2015, pp.45-52
- 5) 日本助産師会「地域で作る妊娠から育児までの切れ目ない支援」『助産婦雑誌 Vol.69-6』医学書院, 2015, 451-478
- 6) 林已知夫・高橋睦子『子育て世代が住みたいと思うまちに』2015, 第一法規
- 7) マニユエル・カステル, ペッカ・ヒマネン 高橋睦子訳『情報社会と福祉国家 フィンランドモデル』2005, ミネルヴァ書房
- 8) *Maternity and child health clinics* <http://stm.fi/en/maternity-and-child-health-clinics> 2015/08/04 アクセス
- 9) フィンランド外務省広報文化局・フィンランド大使館広報部『フィンランドの男女平等』2014, 東京平板株式会社
- 10) 福島富士子「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援について」『月刊地域保健』46(1), 2015, pp.8-13
- 11) 高橋睦子『ネウボラーフィンランドの出産・子育て支援—』2016, かもがわ出版
- 12) OECD Economic Surveys: Finland 2014, OECD, 2014 Doi: 10.1787/9789264201392-en, ISBN 10.1787/eco-surveys-fin-2014-en Better Life Index Finland -OECD

## Field Researches on Family Support Systems in Finland — Neuvola and Child day care center in Rovaniemi, Lapland —

Nachiko KIWAKI

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood Care and Education)

Yukari OTA

(Den-en Chofu University, Faculty of Human Welfare, Department of Social Welfare)

The purpose of this study is focused on family support system of Finland, in the thinking about the socialization of child-care in the perspective of gender (Kiwaki, Ota 2015).

This paper is survey results in Lapland maakunta Rovaniemi City carried out 8/2015, the neuvola and child daycare center (hoikusho).

From the observations and the interviews with local family support, we found their working styles and mottos are much differed from Japanese caregivers.

Neuvola nurse (hokenshi) seemed to have comparable trust with parents and have their own support motto to help hole the family members who have child.

In Child day care center, teacher's and lähihoitaja's (hoikushi) duties and works were environment-friendly. Tools and rooms are also worker's friendly.

**Key words:** Finland, Family Support, Neuvola, Child daycare center, Gender